

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

松波康男

【所属】(助成決定時)

一橋大学大学院社会学研究科

【研究題目】

エチオピア・ボサト地区における参詣儀礼についての人類学的研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究はエチオピア、東ショア地方における参詣者の人びとを対象とするものである。当地には、ムスリム聖者廟や精霊信仰の拠点、民族的聖地などさまざまな文脈で設立した参詣地が点在しており、人びとは定期的にそれらを訪問している。その参詣路や参詣地で開催される儀礼において、参詣者は、それぞれの持つ悩みを吐露しそれへの助言を請うことがみられる。精霊が参詣者の悩みに対して助言を与える儀礼が開催される参詣地もあれば、悩みを持つ個人に代わって精霊が悩みを語る参詣地もある。

本研究ではそのようなさまざまなかたちに形成された当地における参詣行為を、人びとの抱える悩みに対処する一つの実践と捉え、個人が自らの悩みを解決するためにどのような方法をとるのか、そしてその悩みがどのような内容であり、どのような条件が揃えば参詣が敢行されるのか、さらに参詣儀礼を行うことで個人の悩みがどのように変化するのかもしれないのかについて現地調査を通して明らかにするものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

報告者はこれまで、エチオピア東部のボサト県ボリ村を調査の拠点として、東ショアのさまざまな参詣地に赴く人びとの悩み、参詣にいたる動機についての聞き取り調査を継続的に行ってきた。そして参詣者がどのような悩みを抱え、その悩みがどのような社会的文脈から生じているのかについて考察してきた。

今回の調査で重点的な調査を行なったのはアルシ地方の聖地ファラカサで開催されている儀礼とボサト県ボリ村で開催されている宗教集会である。まず、ファラカサで開催される儀礼では、当参詣センターを設置した聖者の子孫にあたる代表者が、参詣者に悩みをたずねることから始まる。ファラカサにおいては、家畜の死、貧困、疾病といったさまざまな種類の悩みは、人間と精霊の不和を感知して近づいた悪魔の兆候であると説明されている。ファラカサの代表者は、悩みを持つ人間のその精霊の仲をとりもち、その悪魔を祓うことによって、悩みを持つ参詣者を癒やそうと試みる。報告者は、今回の調査で、祝日の機会にエチオピア各地からこの地を参詣する多くの参詣者と出会い、この儀礼に参加した参詣者と代表者のあいだで交わされた対話を多数収集した。

一方、ボリ村の宗教集会では、霊媒師に憑依した高位な精霊が、人びとの悩みに助言を与えている。村の霊媒師は、毎週水曜日と金曜日に大規模な集会を開催している。この集会は夕方から明け方まで及ぶものの、村外からも参加者が集まる。この精霊は問題解決能力が高く、人間の知り得ないことを知る博覧強記な存在として村の内外に広く知られている。ここでは、人びとの悩みは民族的慣習への違反として指摘されることが多かった。この集会に一定期間のあいだ参加し、人びとと精霊との対話を収集した。そして、両地において収集したデータを書き起こし、調査アシスタントとともに翻訳、分析を試み

た。

【結論・考察】（４００字程度）

今回の調査ではあらたに次のことが分かった。人びとの悩みに対処する調査地のさまざまな儀礼は、ファラカサを拠点とする精霊崇拜の言説にのっとり敢行されることが大半であるが、条件によっては、精霊崇拜の言説とは異なる位置づけにある民族的慣習がそのような儀礼において登場し、それが人びとの悩みと密接に関わっているということである。その民族的慣習の一例がウルファと呼ばれるものである。ウルファとはオロモ語で尊敬を意味する後であり、オロモ社会で長子相続される首飾りや太鼓などのモノを示す一般名詞である。ファラカサにおいて悩みの原因として指示される精霊への供犠の欠如と同様に、ウルファの適切な管理を欠くこともまた人びとの悩みの原因となり得るのである。この発見は、当地において、異なる歴史的文脈を有する精霊信仰と民族的慣習との接点として当該の儀礼を考察するといった新たな視座を提供するものであった。